春・秋連結　｜　今出川校地開講科目

京丹後移住促進プロジェクト
～新たな地方移住の仕組みづくり～

1 目的・概要

本科目は京都府の北部に位置する京丹後市丹後町間人（たいざ）地区で、学生と地域の人々が協働して移住の仕組みづくりに取り組むプロジェクトです。

コロナ禍以降「密」を避ける動きが加速する中、テレワークの浸透もあいまって、自然豊かな地方への移住は現実的で魅力的な選択肢になりつつあります。

間人は、日本海に面したすり鉢状の地形をもつ人口約 2,000 人の地域で、ユネスコから世界ジオパークの認定を受けるほどの豊かな景観が特徴です。夏は海水浴や釣り、カヤックなど、アウトドアの名所として知られ、冬は地域ブランドの「間人ガニ」を目当てにした観光客でにぎわいます。

一方、近年の人口減少率と高齢化率は京丹後市内でも特に顕著であり、地域コミュニティの維持が喫緊の課題となっています。

そこで、本プロジェクトでは、間人地区の地域課題の解決の一助となることを目的とした活動を展開しました。具体的には、目の前の課題解決だけに注力するのではなく、間人地区が将来「ありたい姿」を地域住民と共に描き、そこから現時点を振り返ることで、中長期的に解くべき課題を設定・実践することに主眼を置いた活動を行いました。

本プロジェクト科目の初年度である今年度は、移住者と間人地区の住民の双方にとって魅力あるまちを実現する一歩として、「地域住民ひとり一人が地域課題に目を向け、継続的かつ主体的にまちづくり活動を行うことができる土台を作ること」をゴールに設定し、活動を行いました。

Annual Schedule

2021 年	4 月	チームビルディング、間人 U ターン者へヒアリング
	5 月	京丹後市職員・間人移住者の方へヒアリング、間人地区文献調査、現地訪問の行動計画の策定
	6 月	現地訪問（地域の視察、地域おこし団体「まるっぽ間人プロジェクト推進協議会（以下、まるっぽ間人）」との合同会議、現地ヒアリング）、お試しワークショップ構成決め
	7 月	k-plus solutions 田中様による講演（ワークショップ事前アドバイス）、お試しワークショップ開催、春学期成果報告会
	8・9 月	他地域事例リサーチ
	10 月	日商社 喜田様による講演（地域住民とのコミュニケーション戦略に関して）、ワークショップチラシ作成、ワークショップ構成決め
	11 月	間人区長との会議、第 1 回ワークショップ開催、移住候補者へのヒアリング
	12 月	第 2 回ワークショップ開催、現地視察（セリ見学・漁師との交流）
2022 年	1 月	「まるっぽ間人」への成果報告会、秋学期成果報告会

2 成果達成度

本科目の成果としては、1つ目は、地域住民と合計3回のワークショップを実施し、間人地区における課題・解決策を明らかにしたことです。

春学期は、オンラインインタビューや現地へのフィールドワークで、合計11名の方にヒアリングにご協力頂き、地域の方が自信を持って間人の良いところを伝えられていない点や「何もないところが良い」と発言されていた点から「現地の方々が地域の魅力に気づいていないこと」が移住促進における根本的な課題であるという仮説を立てました。この仮説を踏まえ、「地域のありたい姿と魅力を考える」お試しワークショップ（7月）を開催しました。本ワークショップでは、地域住民の中でもまちづくりに意欲的な9名の参加者とともに地域の魅力を再確認するワークを実施しました。また、秋学期にワークショップを広く地域住民に展開することを見据え、運営上の課題を確認しました。

秋学期は、ワークショップの存在をより多くの地域住民に認知してもらうため、実施前にはチラシを間人地区の全世帯（約800世帯）に配布したり、春学期に知り合った地域住民の方に直接呼びかけたりする等、広報にも力を入れました。『間人 未来のまちづくりワークショップ』では、延べ66名の地域住民の方と「間人の現状・ありたい姿・問題点・解決策」について話し合うことができました。第1回目（11月）では、春学期のお試しワークショップにおいて洗い出された、将来の間人地区にとって重要と思う6つのテーマ「自然、教育、観光、コミュニティ、仕事､医療･福祉」についてロジックツリーを作成し､地域の現状･あるべき姿を明らかにし、それらの差異から地域の問題を確認するワークをしました。第2回目（12月）では、第1回目で浮かび上がった問題と、事前にオンラインで実施して得られた移住者視点の意見をすり合わせながら、地域の課題とその解決策を見つけるワークをしました。その結果、「自然、教育、人づくり」の3つのテーマが最重要課題であることを認識し、それらの解決策を検討しました。

2つ目は、間人地区においての理想の移住者像を明らかにしたことです。秋学期に「潜在的な移住候補者へのヒアリング」（11月）をオンラインで3名の方に行いました。間人地区や地方移住に興味がある方の視点を取り入れることで、間人地区の住民にとってだけでなく、間人地区外に住んでいる潜在的な移住候補者にとっても魅力のあるまちづくりを行うための示唆を得ました。

3つ目は、地域住民の方々のまちづくりへの主体性と、地域住民の方々と本プロジェクトメンバーの信頼関係を構築したことです。合計4回の間人地区の訪問だけでなく、オンラインやSNSでもコミュニケーションの回数を増やしたことで、地域と強い繋がりができました。また、ワークショップでは住民自身で考えて議論してもらうことで、地域活動への意欲を高めることができました。その結果、住民の方々から「間人をもっと良くしたいと思った」「この活動を何年も継続したい」「年齢を問わず楽しく討論ができた」と言って頂けました。

3 プロジェクトを通じて

長いようであっという間だったこの１年間の活動を通して感じた、地域における魅力の捉え方の変化とチームワークの向上について述べようと思います。

まず、魅力の捉え方の変化です。一年間の活動を通じて、私たち履修生は自然や歴史といった観光地としての魅力から、実際にその地域に住んでいる人で地域を捉えるようになっていきました。実際、春学期には「現地の方々が地域の魅力に気づいていないこと」を地域が抱える課題の仮説に設定し、将来の間人にとって重要になる項目として、自然・文化・インフラなどを挙げていました。そこから地域での活動を重ねて、最終的には自然・教育・人づくりの３つの項目にブラッシュアップされ、そこに住んでいる人目線で地域のことを捉えられるようになりました。このように、地域を構成しているものは自然や建物といった景観というよりむしろ、人なのだと気付くことができました。京丹後と似た景観の地域は日本に複数あるものの、そこに暮らす人は地域によって当然異なります。京丹後ならではの移住を促進するうえで、景観ではなく人に地域の真の魅力があると履修生が気付けたことは、来年以降の活動につながると思います。

次に、チームワークの向上についてです。本プロジェクトの履修生は、運営最少人数の５人だったので、一人一人の活動量がとても多いプロジェクトでした。４月に、プロジェクト管理・課題・リサーチ・地域連携・発表の役割に分かれ、それぞれがリーダーシップを取って活動を進めてきました。しかし、春学期の活動では、メンバー全体での情報共有が不十分で、行事ごとに特定のメンバーに負担が集中してしまいました。そこで、夏期休暇中に運営上の問題をメンバー全員で話し合い、解決策を考えました。秋学期では、特定のメンバーのみに直接関係する内容であっても全体で共有し、各メンバーが何をしているのか常に全員が把握できているように心がけました。強い協力関係が築けたことで、春学期よりも地域での活動の規模が大きくなり、膨大な準備時間が必要でありながら、春学期以上のモチベーションを保って半年間駆け抜けられました。今となっては、最少人数の５人だったからこそ、たった一年間で「まちづくりの土台」を作り上げられたのではないかと思います。

編集後記

この１年間を通して、「間人」という地を舞台にたくさんの人と出会い、初めてのこともたくさん経験させて頂きました。本プロジェクトは初年度ということもあり、０→１を作り上げる難しさはあったものの、関係者皆様のおかげでそれ以上のやりがい・楽しさを感じることができました。新型コロナウイルスにより先行きが不透明な環境下で、４度の現地活動やその他授業外活動を行えたのも、京丹後市の皆様、プロジェクト科目を担当してくださった泉川先生、波多野先生、TA の楠さん、SA の田中さん、事務局の職員さん等の多大なるサポートのおかげです。学生一同、心より御礼申し上げます。今年度作り上げた土台を基に、来年度の更なる活動展開を楽しみにしております。

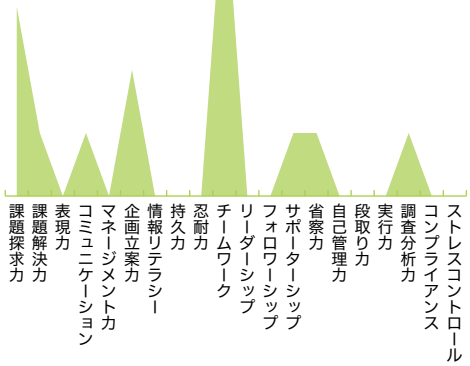
プロジェクトメンバー

井上 碧（経済3）　田中 なつ（経済3）　倉橋 竜平（経済2）　田中 なな（商3）　服部 伶奈（政策3）

プロジェクト活動 アンケート集計結果

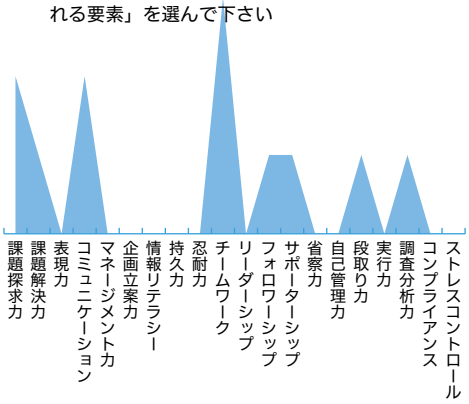
授業開始時

Q1 チームとしてのプロジェクト活動に「必要と思われる要素」を選んで下さい

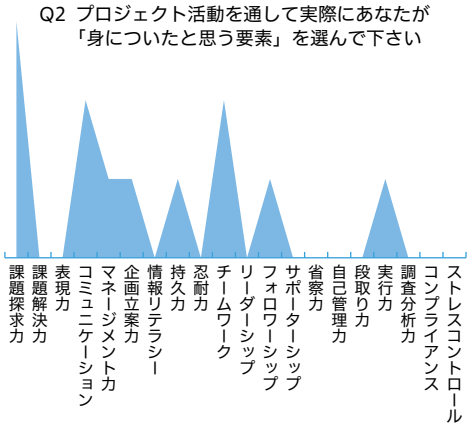


春学期終了時

Q1 チームとしてのプロジェクト活動に「必要と思われる要素」を選んで下さい

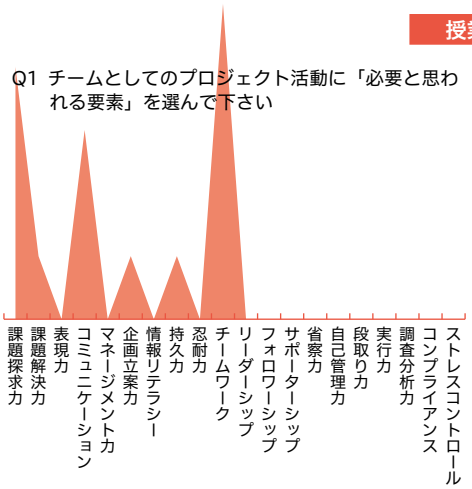
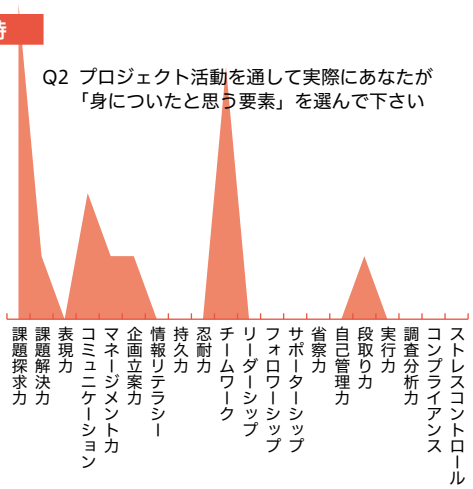


Q2 プロジェクト活動を通して実際にあなたが「身についたと思う要素」を選んで下さい



授業終了時

Q1 チームとしてのプロジェクト活動に「必要と思われる要素」を選んで下さい



Q2 プロジェクト活動を通して実際にあなたが「身についたと思う要素」を選んで下さい